

国立国語研究所プロジェクト「複文構文の意味の研究」
第一回研究会
日本語の複文の「内」と「外」: 類型論の複文研究の成果をふまえて

堀江 薫

名古屋大学大学院国際言語文化研究科
horieling@gmail.com

1

本発表の構成

1. 複文の類型論的研究および日本語の複文研究の概観・現状・接点
2. 複文の「内側・外側」: 「主節現象」を中心に
3. おわりに

2

1. 複文の類型論的研究および日本語の複文研究の概観・現状・接点

- 一般言語学の「複文」: 「関係節」「補文」「副詞節」「等位節」(日本語学用語との対応)
- (A) (関係節) the man [*who bought the book*] = 連体修飾節 (連体複文構文)
- (B) (補文) John thinks [*{that/0} his wife told a lie*]. = 補足節?
- (C) (副詞節) [*If John thinks so*], that's fine. = 連用修飾節 (連用複文構文)
- (D) (等位節) [*John is happy*] and [*Mary is happy, too*]. = 連用修飾節?

3

類型論・機能主義言語学の複文研究: 伝統的な複文の4分類をめぐって

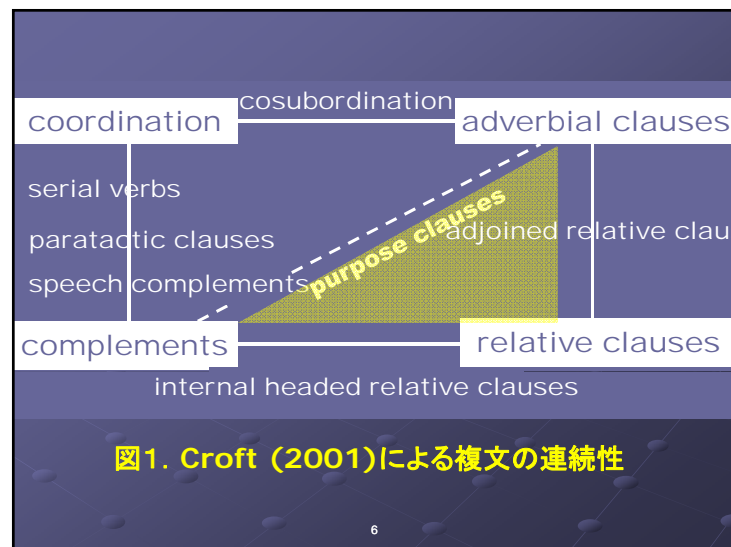
- 4分類を前提:
 - Shopen (1985, 2007) 所収の諸論文, Horie (2000, 2001) Haiman and Thompson (1988), Cristofaro (2003)
- 4分類を修正: Foley and Van Valin (1984) 「等位接続(coordination)」「従位接続(subordination)」という伝統的な複文の二分法の不備を補うべく「cosubordination」という第三のカテゴリーを提唱

4

Croft (2001):根源的構文文法

- 伝統的な四タイプの「複文」: 実際には「プロトタイプ」構造を有し、図1に示すような**構造的連続性**を示すと主張
- 根拠: 図1で四つの角に配置された複文のうち二者の間に**両者の性質を備えた中間的な構文**が存在するという類型論的な事実
- 例: 「関係節(relative clause)」と「補文(complement)」という二つのタイプの複文の間に「主要部内在型関係節」が存在

5



6

日本語の「の」名詞節の機能領域

- (1) [りんごが置いてあったの]に気づいた。
(補文)
- (2) [りんごが置いてあった]のに、気づかなかった。
(副詞節)
- (3) [りんごが置いてあったの]をそっとポケットに入れて持ち去った。
(主要部内在型関係節)

7

1.1 日本語学の複文研究との 接点(1): 従属節の階層モデル

- 南(1974, 1993)の従属節の階層モデル (A類~D類)とFoley and Van Valin (1984)の類型論的階層モデルの平行性:

構造内にどのような文法要素(operator)の生起を許容するかという作用域(scope)によって従属節を分類 (大堀(2000)などが指摘)

8

1.1 日本語学の複文研究との接点(1'): 「定形性」をめぐって

- 三尾(1942), 三上(1972), 南(1974, 1993)
以来現代日本語文法研究会(2008)に至る
「陳述度」「従属度」の概念

1970年代: 生成文法、機能主義言語学の「主
節現象」研究 (Hooper and Thompson
1972, 影山太郎氏の研究など)

9

機能主義的類型論研究: T. Givonらの研究
(Givon 1980, 1990)を経て、「定形性」
(finiteness)の概念を再検討 (Bisang 2007)

→ 2節で詳述

10

2. 複文の「内側」: 主節現象を中心に

- 「主節現象(main clause phenomena)」:

1970年代: 生成文法, 機能主義的言語学
「主題化 (Topicalization)」、「方向副詞前置」、
「否定構成素前置」といった主に主節で適用
される変形規則

- Hooper and Thompson (1973): 従属節では
「前提 (presupposition)」ではなく「断定
(assertion)」を表す節においてのみ適用

11

話題化 (topicalization)

- 主節:

(4) This book, John never reads.

- 従属節:

(4') I {claim /*regret} [that *this
book, John never reads*].

12

日本語(および韓国語)の 題目助詞:(基本的に)主節現象

(5a) 弟は**は**この本を持っている。

(5b) Namtongsayng-**un** i chayk-ul
younger brother-TOP this book-ACC
kaci-ko issta.
have-CONT: DECL

13

連体修飾節: 題目助詞→主格助詞へ交替

(6)(a) [弟***は**/がこの本を持っている]こ
ことを知った。

(b) [Namtongsayng-***un/i**
i chayk-ul kaci-ko iss]-um-ul
こと - を
alassta.
知った

14

日本語学: 陳述度, (節の) 従属度

- 従属節(特に連用修飾節)が主節とどのよ
うに異なるか?
- 文法要素との共起制限による段階性
(gradience)を観察・記述

三尾, 三上, 南, 現代日本語文法研究会らの
研究蓄積

15

日本語の主節と従属節

- (7)(a) きれいな花がさいた。(文=主節)
- (b) きれいな花がさいたが、すぐ散ってしまった。(「が」連用節)
- (c) きれいな花がさいたことをニュースで知った。(名詞節(補文))
- (d) きれいな花がさき、暖かい春風も吹き始めた。(連用形による連用節)
- (e) きれいな花がさいて、暖かい春風も吹き始めた。(「て」形による連用節)

16

丁寧形との共起制限

●三尾(1942):丁寧化百分率

(8) が	94.5%
けど	86.0
から	73.0
し	58.0
ので	28.0
と	7.3

17

三上(1972)

- 主節末が丁寧形するとき、従属節の述語部分も丁寧形になるか:丁寧形になる従属節(9a)は、ならない従属節(9b)よりも文らしさ(陳述度)が高い。
- (9) (a) 太郎が部屋に入りまして、明かりをつけました。
(b) 太郎が部屋に入り(*まし)、明かりをつけました。

18

南(1974, 1993) の従属節の階層的類型

- A類(～ながら(同時性)、～つつ、～て(継起)、～(連用)中止形(継起)等)
- B類(～のに、～ので、～ながら(逆接)、～と、～なら、～たら、～て(並列・理由)、～ても、～(連用)中止形(並列・理由)等) **丁寧形**
- C類(～が、～けど、～から、～て(逆接)、～(連用)中止形(逆接)、～し等) **主題**
- D類:直接引用節

19

類型論における「主節現象」への関心の再燃:
「**定形性**」(finiteness) を決定する文法カテゴリ

東アジア言語(例:日韓語)の主節現象も考慮:

- Tense(時制)
- Illocutionary force (発話の力)
- Person(人称)
- Politeness(丁寧さ)

(Bisang 2007) ²⁰

通言語的に見た日本語の 主節現象

- ヨーロッパ言語の「定形性」(人称・性・数などと連動)は異なるが、「主題」「丁寧さ」「終助詞」など主節に典型的に見られる現象が存在(韓国語と共通)

東アジア言語・東南アジア言語の孤立型言語(例:中国語, タイ語)に比べると、述語の形態変化があり、「主節」「従属節」の区別がより明示的

21

日本語の「主節現象」の特異性: 韓国語との対比で

- I. 丁寧形が「主節」の文末を決定する安定的な指標となりえるか?
- 日本語: 必ずしもなりえない
連用修飾節(B~C類)はもとより連体修飾節にも生起可能
- 韓国語: 概ねなりえる(例外は非常に限定的)

22

南(1987)の観察: 連体修飾節に おける丁寧形の生起

(10)(a) [きのうさし上げましたえび]は、もうおあがりになりましたか。

(b) [こちらからお送りします用紙]に御署名御捺印の上お返し下さいませ。

23

Matsumoto (2009)

- 慣習的な改まり(conventional formality)が好まれるサービス産業の対顧客といったコンテキストで使用

(10)(c) [お申込みになりました]カードを発行させて頂きます。(p.296: 原文ローマ字)

24

韓国語の上称形(日本語の丁寧形に部分的に対応)

(11a) * [ecey tulye-ss-*supnita*-ten]

昨日	差し上げる-過去-上称-過去(回想)連体
saywu-nun	pelsse tusye-ss- <i>supni-kka</i> .
えび-題目	もう 召し上がる-過去-上称-疑問

「きのうさし上げましたえび」は、もうおあがりになりましたか。」 (堀江2001:201)

25

上称形の生起可能な(引用節以外で)唯一の従属節

● (12) [capci-nun iss-*supnita*-man],
雑誌一題目ある—上称-MAN

sinmwun-un eps-*supnita*.
新聞一題目 ない—上称

「雑誌はありますが、新聞はありません。」

26

引用節と連体修飾節の接続

● II. 主節が明示的な引用標識なしに、あるいは明示性の低い引用標識を媒介して主要部名詞に接続できるか?

日本語: できる
韓国語: できない

27

直接引用節と連体修飾節の接続: 明示的な補文化標識が必要(「という」「ha-nun」)

(13) (a) 「来た！」という言い方

(b) “Wa-ss-ta!” *la ko ha-nun* maltwu
来る - 過去 - 下称 と - いう - 現在連体 言い方

28

直接会話修飾節(メイナード2008)

(14)

- (a) [ご主人さまが2年間の長期の旅から帰ってきましたよ]、なイメージ
- (b) [どうしましたか]、の問い
- (c) [来た!]感、高まる。(メイナード2008: 73-75; 表記を一部修正)

29

韓国語: 直接会話修飾節は不可

- (13')(a) *["Wa-ss-ta!"] {∅} nukkim-i
来る - 過去 - 下称 感じ - 主格

kanghayci-n-ta.

強まる - 現在 - 下称

(「来た!」感強まる に対応)

30

類似会話修飾節(メイナード2008)

(15)

- (a) [ヨン様がやっているよ~] みたいな表示は一切なし。
 - (b) [で、あんたはこんなところで何してんの?] 的表情
- (同上: 78, 80; 表記を一部修正)

31

3節. まとめ

- 日本語: 「主節」と「従属節」の境界がより**非確定的・流動的**
- 「主節現象」の従属節への**浸透**が広範囲に観察
- 連用修飾のみならず、**従属度の高いと思われる連体修飾節**でも主節現象が観察

32

韓国語:「主節」と「従属節」の境界をより明示的に区別

「主節現象」の従属節への浸透は非常に限定的

- 形式と意味の関係を一対一に保つ傾向が日本語よりも相対的に高い(堀江2001)

33

● 日本語:

主節の文末を明示的に終結させる指向性が相対的に弱い → 主節現象が従属節に浸透しやすい

cf.影山(2002)が日本語動詞の「行為の結果よりも過程を重視する」特徴を含む複数の現象から抽出した「ケジメのなさ(「無界」性)」という特徴とも連関

34

参考文献

- 現代日本語文法研究会(編)2008.『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版
- 堀江 薫2001.「膠着語における文法化の特徴に関する認知言語学的考察:日本語と韓国語を対象に」山梨正明他(編) 89-131.
- 堀江薫, プラシャント・パルデシ2009.『言語のタイポロジー -認知類型論のアプローチ-』研究社
- 影山太郎 2002.『ケジメのない日本語』岩波書店
- メイナード・泉子・K.2008.『マルチジャンル談話論 間ジャン ル性と意味の創造』東京:くろしお出版
- 三尾砂1942.『話言葉の文法(言語遺編)』東京:くろしお出版(復刊1995)
- 三上章 1972.(1953第一版)『現代語法序説』くろしお出版
- 南不二男1974.『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男1987.『敬語』岩波書店
- 南不二男1993.『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

35

- Bisang, Walter. 2007. Categories that Make Finiteness: Discreteness from a Functional Perspective and Some of its Repercussions. In: Nikolaeva, Irina (ed.) 2007. *Finiteness*. Oxford: Oxford University Press.115-137. Cristofaro, Sonia. 2003. *Subordination* (Oxford Studies in Linguistic Typology). Oxford: Oxford University Press.
- Foley, William, and Robert Van Valin Jr. 1984. *Functional Syntax and Universal Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haiman, John, and Sandra A. Thompson (eds). 1998. *Clause Combining in Grammar and Discourse* (Typological Studies in Language 18). Amsterdam: John Benjamins.
- Hooper, Joan B., and Sandra A. Thompson. 1973. On the Applicability of Root Transformations. *Linguistic Inquiry* 4.4, 465-497.

36

Matsumoto, Yoshiko. 2009. Pragmatics of Japanese Performative Honorifics in Subordinate Clauses. In: Fraser, Bruce, and Ken Turner (eds.), *Language in Life, and a Life in Language: Jacob Mey – A Festschrift*. Emerald Group Publishing Limited, 289-298.

Shopen, Timothy (ed.). 1985, 2007. *Language Typology and Syntactic Description*. Vol. II. *Complex Constructions*. 1st, 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.